校長通信　2022 年度　第 10 号 1 月 20 日（金）

校長通信

Morifun

＜2023 年癸卯でジャンプ!＞

新しい年を迎えました。遅くなりましたが、今年もよろしくお願いします。さて、2023 年は「癸卯（みずのと・う）」の年です。卯、つまり兎は、十二支の一つですね。癸（キ：みずのと）は、十干の一つで、一から十まで数えるための言葉です。十二支や十干は、それぞれ独自の意味が当てられています。「癸」は 10 番目を表していて、物事の終わりと始まりを意味するとともに、「種子が計ることができるほどの大きさになり、春が間近でつぼみが花開く直前である」という意味もあるとされています。また「卯」はもともと「茂」という字が由来といわれ、「春の訪れを感じる」「冬の門が開き、飛び出る」という意味があるとされています。この二つの組み合わせである「癸卯」には、「これまでの努力が花開き、実り始めること」という意味を表しているといわれます。

コロナとはまだまだ付き合っていかなくてはならないようですが、各自が自分の夢や目標に向かってジャンプし続ける 1 年になることを祈念しています。そして「成功の反対は失敗ではなく、挑戦しないこと」です。失敗を恐れずにジャンプしましょう！

＜クリスマス礼拝＞

12 月 23 日の終業式の日にクリスマス礼拝が厳かに行われました。盛岡松園教会牧師の上野和明先生をお招きし、聖書朗読そして説教をいただきました。「同じパターン」と題して、自分が正しいと思い込むことの危うさについてのお話しでした。新型コロナウイルス感染症の流行やウクライナ情勢等、世界全体で不確実性が高まり、予測困難な時代だからこそ、心に響くものでした。その後献金、キャンドルサービスが行われました。ろうそくの灯を見つめながら、それぞれこの一年について等思いを馳せることができました。

＜1/17 始業礼拝より＞

新約聖書　ローマの信徒への手紙　12 章 17 節

皆さんはさかなクンは知っていますね。そのさかなクンの YouTube の動画で、家で育てている魚を紹介していて、印象的なことを話していました。「魚たちは一見仲良くしているように見えるが、実はお互いに無関心である。お互い無関心であることで適度な距離で共存できる」大きな水槽の中で色んな魚が泳いでいると仲良くしているように思えるのですが、実はお互いに無関心ということで、だからこそ喧嘩もせずに共存できているということを聞いて納得しました。

互いに無関心であることを私たち人間社会では否定的に捉えることが多いです。自然の世界ではむしろお互い関心を抱きすぎずに適度な距離を保っていることが共存するための大切な要素だと知りました。このさかなクンの言葉と通ずることを、朝日新聞の記事でミッツマングローブさんがこう仰っていました。「私が思う多様性は生理的な好き嫌いではなくて、互いの存在に無関心になっていること」これも印象的な言葉ですが、ここでも無関心という言葉が否定的な響きではなくて、それぞれ違う存在が一緒にいるための大切な意味を持った言葉として扱われています。

愛の反対は無関心という言葉、これは広く知られていますが、僕も高校生の時に知って、確かにそうだなと思いました。関心を持ってもらうのは嬉しいし、反対に自分の存在が顧みられないのは悲しいことです。関心を持つというのは誰かと繋がるうえでとても大切な要素です。一方で、関心の持ち方にも色々あるなと思いました。例えば今ツイッターとか SNS で炎上することがよく起こります。炎上は多くの人の関心を呼びます。中には大丈夫かなと、問題が解決してほしいなと、心配して色々調べている人もいるでしょう。と同時に炎上していることを面白がって見ている人もいると思います。また攻撃する材料を見つけようとして関わっている人もいると思います。そう思うと、他者に関心を持つことすべてが無条件で素晴らしいことではなくて、その中にはよい場合もあればそうでない場合もあることが分かります。

愛の反対は無関心と今言いましたが、そういうことを思うと必ずしも無関心は否定的に捉えるものではありませんね。むしろ本当に人を傷つけてしまう悪意のある関心を持って関わることがあるかもしれません。もっと困らせてやろう、攻撃してやろう、意地悪してやろう、そういう悪しき関心で人に近づこうとする姿勢、それこそが愛とは正反対の姿勢です。こういうことを一昨日妻と話していましたが、妻は先ほどのミッツマングローブさんの言葉から、愛の反対は無関心というよりも悪しき関心なのではないかと言っていました。

聖書が語る愛は相手を重んじて大切にすること、愛の反対は相手を軽んじること。それを考えると悪しき関心をもって人と関わるのは、相手を軽んじることに繋がっていると思いました。もちろんストレスが溜まると、ついつい悪しき関心を持って人と関わってしまったり、物事をしようとしてしまったりすることもあります。誰かを攻撃したいなと思うこともあります。

社会で起こっている色んなことに関心を持つことは私たちにとって大切な課題であり、同時に悪しき関心をいかに制御しコントロールしていくかということも、今を

生きる上で大切な課題であると思われます。時にはあえて無関心を貫くことが必要なことがあるかもしれません。もちろんここでの関心は、困っている人がいても手を差し伸べないという意味の無関心ではありません。また意図的に誰かを無視するという無関心でもありません。無関心と表現すると否定的に聞こえるかもしれないので、悪しき関心を人に向けないと言い換えるのがより適切かもしれません。その姿勢は相手の考えを尊重する、相手の存在を受け入れることに繋がると思います。自分とは違う相手の存在を認め受け入れること、それは人を愛することにも繋がっていきます。

僕たちは必ずしもみんなと仲良くする必要はありません。30 人の人がいれば 30 人みんな違うし、中には気の合う人、気の合わない人もいます。大切なことは自分とは違う人に悪しき関心を持って傷つけたりしないことです。そのために時には一定の距離を保ちお互いに無関心であること、それも互いを尊重しあう一つの方法なのです。魚たちは本能的に互いに無関心でいますが、私たち人間は意識的に相手の存在を認めて尊重することができます。私たちの決意、決心で平和に生きていくことは実現可能であると思います。最後に神様は私たち一人一人を大切な存在として重んじてくださっていることを伝えたいと思います。（花巻教会牧師・鈴木道也先生）

＜追悼　アントニオ猪木＞

昨年の 10 月 1 日にアントニオ猪木が亡くなった。難病の「心アミロイドーシス」を患い闘病生活を送っていたが遂に帰らぬ人となった。彼の死後、追悼番組や死の直前の様子を撮ったドキュメンタリーが放送され、プロレス界を始め各界からたくさんのコメントが寄せられた。

私はプロレスが市民権を持つ以前からのプロレスファンで特に猪木には心酔していた。小学校 2 年の時に現在の盛岡体育館に日本プロレス（この当時猪木は海外武者修行のため不在）を観に行き、すぐ虜になった。父親はプロレスが好きだったわけではなく、たまたま知り合いから招待券（2 階席だった）をもらい私を連れていってくれたのである。父は「こりゃあ茶番だ」「ショーだな」と私の横でブツブツ言っていたが、私はその迫力に圧倒され何と声まで上げて声援を送っていた。実は当時の我が家（お店）は現在のクロステラスの辺りの長屋の一角にあった。プロレス興業があったその日の昼に外人レスラーが盛岡駅から恐らく宿泊先に向かってぞろぞろと歩いてきて、その巨体を見に店から飛び出した私はその中の一人のレスラーに担がれるというハプニングに遭った。マスクマンや髭面など、皆巨漢の割には愛想が良く、手を振って歩いて行く姿に感動し、漫画少年からプロレス少年へとその一歩を踏み出したのである。

当時テレビ局は NHK と教育テレビ（現在の E テレ）そして IBC しかなく、アントニオ猪木が出る日本プロレスの放送は観られず（IBC では国際プロレスが放送されていて、これはこれで楽しめたのだが）、本屋で『ゴング』というプロレス誌やバスセンターまで行って『東京スポーツ』という新聞を買っては猪木のプロレスに思いを馳せていた。小学校 6 年（1969 年）の 12 月にテレビ岩手が開局し金曜の夜 8 時から、やっと日本プロレスが観られるようになった。実はこの年の 10 月から試験放送というのが始まり、金曜日の昼の 3 時からプロレス放送があり、豪華なプログラム（猪木と馬場がタッグを組んだタイトルマッチ）だったので何とか理由を付けて小学校を早退して観ようと思ったのだが、商売をしているから両親が家に居るわけで、そんな大胆なこともできずに涙を呑んで諦めたことを今でも割と鮮明に覚えている。ビデオなんてない時代だから…

その後、猪木は日本プロレスを追放され（今でも理由がよく分からないのだが）、新日本プロレスを立ち上げ、こちらは今のテレビ朝日だったので、再び猪木の雄姿を観ることができなくなり、高校時代は『ゴング』ではなく『スクリーン』が愛読書となっていった。

しかし大学で復活。私が住んだ県は TBS 系はなかったがテレビ朝日系があり、モハメド・アリとの世紀の一戦も友人の家でしっかり観戦。1980 年 2 月にはウィリー・ウイリアムスとの異種格闘技戦があり、この時は地元岩手にいたので、友人 3 人とポータブルテレビを持って岩山に行き観戦、高いところに行けば電波が届くと思ったが、全く映らずガックリ。大学生にしては考えが浅はかであったと、今では笑い話となっている。

千葉県で教員になった頃、お金がなくてテレビも洗濯機も持っていなかったので、毎週金曜日は近くの同僚のアパートに行き、プロレス中継を観ながら洗濯という日々を過ごす。途中でこれはさすがに迷惑行為だと気付き、12 月のボーナスで家電を買い揃える一幕もあった。

結婚して子供ができて、何となくプロレス中継から遠ざかっていき、猪木も 1989 年に引退したのをきっかけに全くプロレスというものとは縁がなくなってしまった。その後、猪木は政界に進出。「国会に卍固め、消費税に延髄斬り」には笑ってしまったが、湾岸戦争で日本人人質解放のために尽力したり、北朝鮮でプロレス興業を行い拉致問題解決に向けて取り組んだりもした。時にはリングに上がり、あるいは公の場で「元気ですかー！元気があれば何でもできる」と叫んでいる姿を眼にするくらいだった。猪木の闘病生活を知ったのは亡くなる一年前位だったが、まさかあの猪木が病死するとは信じられなかった。

プロレスをメジャーにしたのは確かに猪木である。村松友視という作家が『私、プロレスの味方です』を出版したのが 1980 年、その頃を境にプロレスは市民権を獲得していく。確かにプロレスはエンタテインメントであり真剣勝負とはいかないかもしれないが、人の心を熱くしてくれる。私の猪木やプロレスにまつわるエピソードはもっとあるのだが、これ以上書くと深みにはまってしまうので筆を置くとしよう。